

『ファウスト』 雑感 VIII
— 魔女 —

Notizen über „Faust“ 8
— Hexe —

漆 谷 克 秀
Katsuhide Urushidani

8. 魔女 (Hexe)

「魔女はたいがい貧しく、悪行で何か旨い汁を吸えるわけではない」と、なにかの本で読んだことがある。一応、「黒」が魔女の衣服の定番の色であるのだが(第二次世界大戦前のアメリカ映画「オズの魔法使い」やアニメ「白雪姫」から、魔女は黒い服を着て、黒いとんがり帽を被ることになったらしい)、以前ブロッケン山に行ったときに買ったトートバッグには、継ぎ接ぎだらけの衣服を着て、汚らしいスカーフを被り、箒をまたいで、ハルツ山地の空を楽しそうに飛んでいる魔女たちが図柄になっている。美しく着飾った魔女は、というところには思い浮かばない。「白雪姫」の継母ぐらいであろうか。それも嫌われて殺されてしまうのであるから、損な役回りである。「悪」の世界にも位階があって、魔女は下位の序列にあるようだ。また、上位の悪魔と契約を結んでいて、悪魔に従い、悪事を働かねばならない。われわれ人間にとっては恐ろしい存在であるはずだが、アニメなどの影響であろうか、「魔女」と自称する女性が増えていると聞く。確かに似つかわしい人もいる。

先に述べた「古典的ギリシャ」にあつて「魔女」と呼ばれて登場しているものがある。むしろ「妖怪、化け物、怪物」といってほうがよいように思えるのだ。しかし、ギリシャ神話の「妖怪ども」と中世の「悪魔、魔女」との間に断絶があるとは言い難いし、キリスト教の宣教師さんたちも、ギリシャ・ローマ神話やゲルマン神話への信仰をキリスト教の布教のために役立てていたともいわれている。ここでは、わたしたちが「魔女」といわれて思い浮かべる形象、鼻の曲がった「北方の魔女」を対象とし、主として、第一部の「魔女の厨」(Hexenküche)と「ワルブルギスの夜」(Walpurgisnacht)を取り上げる。

8-1. 魔女の厨

契約をすませたあと、メフィストフェレスはファウストを「ライブツィヒのアウエルバッハケラー」(Auerbachskeller in Leipzig)に連れて行く。そこの集まって飲んだくれる大学生たちの馬鹿騒ぎを戯画的に描きだす。そのことによって大学生の生活の無内容な低俗さが示され、ひいては、大学のアカデミックな様態の無意味さ、学問の空虚が暗示されてくる。

しかし、ファウストは、大学生と唄ったり、踊ったりすることに興味もなく、なんの喜びも抱かず、ただ無関心な傍観者として、メフィストフェレスの魔法を眺めているだけである。メフィストフェレスは、ファウストに青春の情熱を取り戻す必要を感じ、若返りの霊薬を飲ませるべく、「魔女の厨」に連れて行くのである。そして、この場は、ファウストが霊薬を飲んだところで終わる。この場はこれで終わってもよいのだが、登場人(動)物たちのやりとりの中で、気になるところを拾っていきたい。

まず、尋ねていった魔女は、宴会に行つて不在であつた。煮えたぎる鍋の中をかきまぜている尾長猿のつがい、チビどもを連れて留守番をしている。メフィストと尾長猿とがつまらない話をしている間、ファウストは何をしていたか。

FAUST welcher diese Zeit über vor einem Spiegel gestanden, sich ihm bald genähert, bald sich von ihm entfernt hat.

Was seh' ich? Welch ein himmlisch Bild
Zeigt sich in diesem Zauberspiegel!
O Liebe, leihe mir den schnellsten deiner Flügel,
Und führe mich in ihr Gefild!
Ach! wenn ich nicht auf dieser Stelle bleibe,
Wenn ich es wage, nah zu gehn,
Kann ich sie nur als wie im Nebel sehn! –
Das schönste Bild von einem Weibe!
Ist's möglich, ist das Weib so schön?
Muß ich an diesem hingestreckten Leibe
Den Inbegriff von allen Himmeln sehn?
So etwas findet sich auf Erden? (2529-40, S.78)

ファウスト (この時のあいだ、鏡の前に立ち、ときに鏡に近づき、ときに離れたりしていた)。

なにを見ているというのだ? この世ならぬ神々しい像が
この魔法の鏡に姿を見せている!
おお愛の神よ、わたしに一番早い翼をお貸してください、
その人のいる野にお連れください!
ああ、この場に立っていないで、
思い切って近づいていくと、
その姿がただ霧の中にあるようにぼやけて見えてしまう!
女性の一番美しい姿だ!
こんなことがあるのか、こんな美しい女性がいるなんて?
この肢体を伸ばした姿に、わたしは
すべての天上の最高のものを見ているのか?
このようなものが、この地上にあるというのか?

ここで鏡に映っている女性がヘレナである。ファウストは、鏡を見つづけており、次第に切ない気持ちになって、狂いそうだとともに叫ぶ。この鏡像がヘレナであることは、最後のメフィストの台詞で判るのだが、「美」の象徴として、誰も比肩できない絶世の美女ヘレナの名が使われている。男なら誰もが惑わされるそのような象徴としての女性像なのであろう。しかし、鏡に映る女性の美しさを認めることはできるのだが、近づくともぼやけてしまうようだ。このことはなにを意味しているのであろう。実体がないということなのか。そのような女性を調達することをメフィストは約束するのだが、果たしてファウストの耳に届いている

のであろうか。霊薬を飲まされる段になるまで、鏡像をずっと見つめている。

このあと、魔女が煙突を通して帰ってくる。ちょうどそのとき、煮えたぎる鍋の中から火花が飛んで、熱い炎を浴びた魔女は、激しい叫びをあげながら下りてくるのだ。メフィストフェレスとくだらないおしゃべりをしていて、尾長猿はかき混ぜる役目をおろそかにしていたためらしい。怒った魔女は柄杓で、メフィストフェレスやファウストにも炎を投げかける。それで、位階が上位にあるメフィストフェレスは、この魔女を叱りつけるのである。

MEPHISTOPHELES.

Hast du vorm roten Wams nicht mehr Respekt?

Kannst du die Hahnenfeder nicht erkennen?

Hab' ich das Angesicht versteckt ?

Soll ich mich etwas selber nennen?

DIE HEXE. O Herr, verzeiht den rohen Gruß!

Seh' ich doch keinen Pferdefuß.

Wo sind denn Eure beiden Raben?

MEPHISTOPHELES. Für diesmal kommst du so davon;

Denn freilich ist es eine Weile schon,

Daß wir uns nicht gesehen haben.

Auch die Kultur, die alle Welt beleckt,

Hat auf den Teufel sich erstreckt;

Das nordische Phantom ist nun nicht mehr zu schauen;

Wo siehst du Hörner, Schweif und Klauen?

Und was den Fuß betrifft, den ich nicht missen kann,

Der würde mir bei Leuten schaden;

Darum bedien' ich mich, wie mancher junge Mann,

Seit vielen Jahren falscher Waden.

DIE HEXE tanzend. Sinn und Verstand verlier' ich sicher,

Seh' ich den Junker Satan wieder hier!

MEPHISTOPHELES. Den Namen, Weib, verbitt' ich mir!

DIE HEXE. Warum? Was hat er Euch getan?

MEPH. Er ist schon lang' ins Fabelbuch geschrieben;

Allein die Menschen sind nichts besser dran,

Den Bösen sind sie los, die Bösen sind geblieben.

Du nennst mich Herr Baron, so ist die Sache gut;

Ich bin ein Kavalier, wie andre Kavaliere.

Du zweifelst nicht an meinem edlen Blut;

Sieh her, das ist das Wappen, das ich führe! (2485-2513, S.80-81)

メフィストフェレス.

おのれは、この赤い胴着を恐れはしないのか？

おのれは、この雄鶏の羽を見分けることもできないのか？

おれが顔を隠していたとでも？

自ら名のりをあげようか？

魔女. オオ、旦那さま、失礼な挨拶をしてお許してください！

蹄が見えなかったもので。

何処にまた、二羽のカラスはいるのです？

メフィストフェレス. 今回は仕方がないか。

おれたち会わなくなって、

いい加減時間もたっているしな。

全世界を舐めまわしている文化というやつが、
悪魔の世界にも広がってきた。

北方のお化けも今ではもはや見られなくなった。

角や尾や鉤爪をどこかに見えているか？

ないと困る蹄の足なんて、

人前で見られると損をするだけだ。

だからおれも、多くの若い奴らがするように、

ずっと前から、偽物のふくらはぎを使っているのさ。

魔女 (踊りながら). うれしくって、気が狂いそう。

サタンの若様にまたここで会えたんだ！

メフィストフェレス. ババア、その名前を呼ぶのは願い下げにしてもらいたい！

魔女. どうしてなんです？ この名前が何か不都合でも？

メフィスト. その名前は、ずっと以前におとぎ話に書き込まれてしまったのだ。

それなのに人間はちっとも良くなっていない。

一人の悪いやつを厄介払いできただろうが、悪いやつが多く残っている。

おまえはおれを男爵と呼びな、そうすりゃ、何ごともうまくいく。

おれは騎士だ、まあどこにでもいる騎士だが。

おまえはおれさまの高貴な血筋を疑ってはおるまい。

これを見ろ、これこそおれが帯びている紋章ぞ！

少し長い引用になった。メフィストフェレスと魔女とのこのやりとりから二つのことが分かる。第一に、時代の風潮が変わったということである。ファウストが生きていた頃は、ルネサンス後期から宗教改革の時代である。悪魔が大手を振って我が物顔で大道を闊歩できる

時代ではないようだ。時代の風潮におもねて、身を潜め、世間の片隅でそっと暮らしている時代なのである。あまりメフィストフェレスにはそのように感じられないのだが、悪魔にとって不合理でしかない「文化」(Kultur)がこの世界に広まっているからである。いかにも悪魔だ、という容姿で出没すると、後ろ指を指され、馬鹿にされるだけだ。

ここでメフィストフェレスがいう「文化」とはどのようなことを示すのであろうか？ 「悪魔」といっても文化の所産ではないのだろうか？ この「文化」とは、悪魔たちが敵対視する事象である。それは、ルネサンスを期にヨーロッパ各地に広まっていった「人文主義」(Humanismus)に特定してもよいのではないか。教会の権威や神中心の中世的世界観から人間を解放し、人間性の尊重をめざして、その多面的な調和を主張する思潮である。辞典に沿ってこのようにいうのは容易だが、現実はなかなかうまくいかないようだ。

魔女が「サタン」と呼んだときにメフィストフェレスはそれを諷めた。「サタン」はもと、神のすぐそばで神に仕える上位の天使の一人であった。しかし、反抗して、神が創り上げようとする世界を破壊しようとし、地獄に墮とされたという、高貴な血筋の由緒正しき家柄のもっとも上位にある悪魔なのである。しかしこの時代になると、子供たちが読む「おとぎ話」に不本意ながら悪役として登場しているだけだ。メフィストは魔女に世俗的な称号である「男爵」と呼ぶように命じる。しかし、「男爵」は「サタン」に比べると、位階も低く、どこにでもいる血筋で、卑しいものと思っているようだ。最後に「紋章」を見せるわけだが、その際に猥褻な仕草をしている。どのような紋章なのであろう、魔女も喜んでいる。

またメフィストは気になることを言っている。おとぎ話に書き込まれ、厄介払いできたその「一人の悪いやつ」(den Bösen, m. sg.)は「サタン」を意味するのであろう。残っている「悪いやつたち」(die Bösen, pl.)は、人間を指している。「善」人の顔をして、「悪」をなす、そんな輩を身の回りに認めることもあろう。嫌みたっぷりの口ぶりである。

次に分かるのが「悪魔」のアトリビュートである。時代の風潮が変わってしまい、その属性を指示するものが多く失われてきた時代でもある。まず悪魔は、「赤い胴着」を着て、「雄鶏の羽」を身につけているようだ。足の一方は馬の「蹄」になっている。だが、それを見せることもできない時代になっているので、「偽物のふくらはぎ」を使っている。この蹄も役に立つことがあった。第二部第一幕で、足が冷たくなって歩くのも踊ることもうまいかないと嘆く茶色の髪の女性が、薬を求めたとき、この蹄でその足を踏みつけ、直してやったのである。また、カラスを二羽、つれているはずだが、そうもいかないらしい。角や尾、鉤爪など、「悪魔」の身体の一部であるのに、蹄と同様、目立たないよう、見られないようにしている。「悪魔」にとっては、とにかく暮しにくい世の中になったようだ。このようなアトリビュートを知っておくと、西洋美術における宗教絵画や歴史絵画などの理解に役立つ。ギリシャ・ローマ神話やユダヤ教やキリスト教の登場人物など、そのアトリビュートでもって特定することも多いのである。

もう一つ書き加えておこう。それは若返りの霊薬を作る際に唄う「魔女の教え歌」(Hexen-Einmaleins)である。霊薬の効能をさらに高めるための呪いのようなもので、それ

自体、意味もなく、内容もない。力を込めて歌い出す魔女を見て、ファウストは「婆さん、熱に浮かされた」(die Alte spricht im Fieber)という。メフィストフェレスは次のように応じる。

MEPHISTOPHELES.

Denn ein vollkommener Widerspruch
Bleibt gleich geheimnisvoll für Kluge wie für Toren.
Mein Freund, die Kunst ist alt und neu.
Es war die Art zu allen Zeiten,
Durch Drei und Eins, und Eins und Drei
Irrtum statt Wahrheit zu verbreiten.
So schwätzt und lehrt man ungestört;
Wer will sich mit den Narrn befassen?
Gewöhnlich glaubt der Mensch, wenn er nur Worte hört,
Es müsse sich dabei doch auch was denken lassen. (2557-66, S.82f.)

メフィストフェレス.

矛盾も完全なものになれば、
賢いやつにも、馬鹿なやつにも同じように神秘的に思えてくる。
いいですか、こんな技は古くからあり、新しいものでもある。
いつの時代にもあるやり方でね、
3と1, 1と3と三位一体で、
真理と称して間違った考えを広めるんです。
そんなくだらないことをしゃべり、はばかりもなく教を垂れる輩がいる。
こんな馬鹿どもとかかざられたくもない。
普通人間というものは、二言三言の言葉を聞いただけで、
そこに何かがあるように考えさせられてしまう。

このメフィストの言葉は辛辣である。人間に対する嘲りともいえる。嘘、偽りも、それらによって固められれば、何か本当のようになってくる。大衆を扇動し、第二次世界大戦に突入していったことを、ヒトラーのプロパガンダにその原因を求めて難じることをするが、その誤りを、嘘を、狂喜して受け容れる大衆が存在したのもある。それは、ドイツの民衆に限ったことではない。

ここでメフィストフェレスは、キリスト教の根本をなす「三位一体」の教理を取り上げている。「三位一体」という言葉自体は、聖書にない。パウロが「コリント人」に宛てた手紙で、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように」

(13, 13)と記す。しかし、このことは数世紀にわたって、論争を引き起こしてきた。唯一の神が「父・子・聖霊」の三つの位格によって啓示されると理解する。しかし、異なる様態を示すこの三つの位格が、同一の「唯一神」の発現で、同等のものであるのかどうか。わたしには分からないのだが、キリスト教徒ならば、同等であると確信するのであり、それを信仰によって示すことになろう。ただメフィストフェレスは、「間違い」だと言っている。この教理が確立された後も、この教理に反する多くの異端が出ている。おそらく、現在でもなお、問い続けられ、反問されているのであって、信仰の礎にもなっているのだとも思える。そう重く考える必要もないだろう。メフィストフェレスの警句は、やたら教えを垂れるようにしゃべりまくる輩には注意せよ、というぐらいに捉えておく。そんな連中が確かに周りにいる。

8 - 2. ワルプルギスの夜

兵役から帰ってきて、自慢の妹グレートヒェンの墮落を知った兄のヴァレンティン (Valentin) は、グレートヒェンの家の前に来ていたファウストとメフィストに決闘を挑み、刺殺されてしまう。二人は、すぐさまそこからずらかり、ハルツ山中のブロッケン山に向かうのである。

5月1日にかけての4月30日の夜にブロッケン山で、魔女たちが集まってエロスの祝宴を催す。待ちわびていた祝祭に、魔女たちや悪魔たちが喜び勇んで繰り出すのである。5月1日は日本でも「メーデー」といわれて労働者の祭典の日のように思われている。ヨーロッパでもそうだが、また、長い冬が終わり、春の到来を告げる喜びの日でもある。青葉が繁り、多くの花々がいっせいに咲き始める。待ち望む時節の到来に、あちらこちらで「五月祭」(Maifest) が催される。

ファウストとメフィストフェレスはハルツ山中の「シールケとエーレントのあたり」(Gegend von Schierke und Elend) に来ている。'Elend'には「不幸・悲しみ」などの意味があり、なにか寓意を含んだ架空の名称かと思ったのだが、原注には注釈もない。山下肇先生の訳注で、「ブロッケン山麓の村名で、現在も鉄道の駅がある」と記されている。実在する地名のようだ。小世界であるが、ファウストにとって最初の「旅」といえる。この「旅」は次のようにして始まる。

MEPH. Verlangst du nicht nach einem Besenstiele?

Ich wünschte mir den allerderbsten Bock.

Auf diesem Weg sind wir noch weit vom Ziele.

FAUST. Solang' ich mich noch frisch auf meinen Beinen fühle,

Genügt mir dieser Knotenstock.

Was hilft's, daß man den Weg verkürzt! —

Im Labyrinth der Täler hinzuschleichen,

Dann diesen Felsen zu ersteigen,

Von dem der Quell sich ewig sprudelnd stürzt,

Das ist die Lust, die solche Pfade würzt!
Der Frühling webt schon in den Birken,
Und selbst die Fichte fühlt ihn schon;
Sollt' er nicht auch auf unsre Glieder wirken? (3835-47, S.121-2)

メフィスト. 箒の柄を欲しくならないか?
おれは、とりわけたくましい牡山羊にのせてもらいたいものだ。
この道じゃまだまだ目的地までは遠い。

ファウスト. この両足がまだ元気なうちは
この節くれだった杖で十分だ。
道中を短くして、なにか役にでも立つのか!
谷、また谷の迷路のなかをゆっくりと進んでいく、
泉が泡立ちながら永久にほとぼしる、
この岩山を登りつめていく。
これこそ、それらの小道が興を添えてくれる喜びなのだ。
春がもう白樺の木々のなかでうごめき、
トウヒの木さえも、もう春を感じている。
春がおれたちの四肢にも良い効果を与えぬはずがない。

登り初めてそれほど時間もたっていないのであろう。それなのにメフィストは「牡山羊」に乗って飛んでいくことを欲する。魔女が箒に乗って飛ぶことはよく知られているが、ヨーロッパの寓意画の中に「牡山羊」に乗って空を飛ぶ魔女の図象がある。このときはなぜか後ろ向きに乗っている。セクシャルな意味合いがあるらしいが、メフィストの台詞はそのことを踏まえてのことである。

ファウストはもう春を迎えたような気分である。魑魅魍魎の跋扈するなかをブロッケン山の頂上を目指して杖をつきながら上っていこうとする。ゲーテは1777年11月29日から12月19日まで、ワイマールの青年貴族たちとともに、ハルツ地方を旅行しており、途中から単騎でブロッケン山に登っている。そのときのことから、詩「冬のハルツの旅」(Harzreise im Winter)が生まれている。この詩には、ブロッケン山を示唆するような言葉もあるが、ハルツ山中の情景をただ映したものというわけではない。ハルツ山中の自然の描写には、ゲーテの観察者としての眼が生きており、それが、この「ワルプルギス」の場にも生かされている。

化物や妖怪、魔女や悪魔が押し寄せる雑踏のなか、メフィストは、脇道にそれて「小世界」とどまることを提案する。ブロッケン山の頂上を目指していたファウストは言う。

FAUST. Doch droben möcht' ich lieber sein!
Schon seh' ich Glut und Wirbelrauch.

Dort strömt die Menge zu dem Bösen;
Da muß sich manches Rätsel lösen. (4037-40, S.127)

ファウスト. だがおれは、あの上に行きたいのだ！
もう灼熱の炎とうずまく煙が見えている。
あそこの悪魔のところに群が押し寄せていく。
そこ行けば、いろいろな謎が解けるのに。

ここの「悪魔」は、ここに押し寄せる連中の頂点に立つ存在であり、そこではもう祝宴が始まっているようだ。ファウストは、そこに行けば、「いろいろな謎が解ける」という。自死を誘うまで追いつめた謎、この世界を動かす根源的な力はなにか、この悪魔たちから知り得るとでも考えていたのか、あるいは、それを期待していたのであろうか。メフィストに軽くあしらわれるが、若返ったとはいえ、その姿に以前と変わらぬファウストが垣間見られるのである。

雑踏を避け、わき道にそれた二人だが、やはり歳の市のような雑踏を通っていく。そこでファウストは、一人の女を認める。多分、魅するような仕草で踊っているのであろう。その女のことをメフィストに尋ねる。

FAUST. Wer ist denn das?
MEPHISTOPHELES. Betrachte sie genau!
Lilith ist das.
FAUST. Wer?
MEPHISTOPHELES. Adams erste Frau.
Nimm dich in acht vor ihren schönen Haaren,
Vor diesem Schmuck, mit dem sie einzig prangt.
Wenn sie damit den jungen Mann erlangt,
So läßt sie ihn so bald nicht wieder fahren. (4118-23, S.129)

ファウスト. 一体あれは誰なんだ？
メフィストフェレス. よくよく観なさい！
リリトですよ。
ファウスト. 誰だって？
メフィストフェレス. アダムの最初の女房だよ。
彼女の美しい髪に用心なさいよ、
彼女が唯一人目を引こうとひけらかす、この飾り立てた髪に。
もしそれで若い男を手に入れると、
おいそれと離したりはしない。

アダムとエバ(イブ)のことはよく知られている。西洋美術史において、古くから多くの芸術家に「楽園からの追放」などのモチーフを提供してきた。またエバは、ヴィーナスと並んで、美人画のモデルにされている。しかし、アダムとリリトが描かれているような絵画を見たこともない。ただ、林檎を食べるように誘惑する「蛇」がリリトである、という説があることもある。いずれにせよ、アダムには、エバ以前に「女」がいたようだ。

「リリト」という名称は、聖書に出てこない。原注によると、『創世記』で、神は自分を形取って、「男と女」を創られた。(1, 27) そのあと、人が一人であることは良くないということで、アダムのあばら骨から女エバを生まれさせた。(2, 21 以下) そのことから、アダムの最初の女房リリトの古代ユダヤ教の言い伝え(Sage)が生じた、としている。つまり、エバが生まれる前に、アダムには同時に創られた「女」がいたはずで、それがリリトだということだ。どうしていなくなったのか、それは聖書に伝えられていない。言い伝えによると、諍いがあった、リリトはアダムと別れ、最高位の悪魔と手を結んだのだ。そしてリリト自身も、「女のサタン」(der weibliche Satan)となっている。女なのに、男性名詞で扱われているのが、腑に落ちない。

若桑みどり著『象徴としての女性像、ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』(2000年、筑摩書房)で、「第2章 禍いをもたらす女」の「第四節 原初の女『リリト』—最も危険なもの」で取り上げられている。若桑氏は、このリリトが「バビロンの淫婦」という指摘を受けて、ミケランジェロが蛇として描き、原初の女怪物であると、推測する。正式の女怪物として描かれたのは15世紀になってからなのであろうか。また、「カバラの伝承によれば、彼女(リリト—筆者注)は、アダムがまだ霊を与えられる前に、連れ添った相手だということである。アダムが魂を吹き込まれ、新しくエバが作り出されたときに、リリトはアダムのそばを去り、海の底へ消えていったとユダヤの旧約注解『ゾハール』は伝える」。(前掲書、198ページ)「魂を吹き込む」とはどういうことなのか。「信仰」と関連しているのであろう。わたしには、何も言わず(?)海の底に消えていくリリトが愛おしく思える。エバが生まれるまで、リリトがアダムの側にいたとするなら、多分夫婦喧嘩をさせて二人を引き裂いた神は、なんの譴責を負わないのか。これだけでは、リリトは危険をもたらす存在、サタンとは言えないであろう。聖書の記述も、12・3世紀に成立したユダヤ教神秘主義の教理『カバラ』の記述もすっきりしないものがある。

インターネットで検索すると、リリトは、古代エジプトや古代ギリシャ、メソポタミアなどの地母神などと結びつき、それぞれの地域で、女怪物の素性のひとつになっている。おそらく、豊穡や多産を願う土着の地母神信仰を否定し、父権の唯一神を上位におくために不可欠なことであったのかもしれない。リリトは、「魔女」の始原とされている。

若い女と老女が座っている。ファウストはその若い女と踊り、メフィストフェレスは老女と踊る。

FAUST mit der Jungen tanzend.

Einst hatt' ich einen schönen Traum:
Da sah ich einen Apfelbaum,
Zwei schöne Äpfel glänzten dran,
Sie reizten mich, ich stieg hinan.

DIE SCHÖNE. Der Äpfelchen begehrt ihr sehr,
Und schon vom Paradiese her.
Von Freuden fühl' ich mich bewegt,
Daß auch mein Garten solche trägt.

MEPHISTOPHELES mit der Alten.

Einst hatt' ich einen wüsten Traum;
Da sah ich einen gespaltnen Baum,
Der hatt' ein — — — ;
So — es war, gefiel mir's doch.

DIE ALTE. Ich biete meinen besten Gruß
Dem Ritter mit dem Pferdefuß!
Halt' Er einen — bereit,
Wenn Er — — — nicht scheut. (4128-43, S.129-30)

ファウスト (若い女と踊りながら).

いつぞやすてきな夢を見た。
そこには林檎の木があつて、
ひときわ輝く林檎が二つ。
それらに心がひかれ、よじ上った。

美女. 林檎をみなさま欲しがると、
パラダイスのときからずっと。
わたし、うれしくて、心をふるわせる、
わたしの庭にも二つの林檎が実をつけて。

メフィストフェレス (老女と).

いつぞや卑猥な夢を見た。
そこには裂けてる木があつて、
木には———がありました。
とても — だったが、気に入った。

老女. それじゃわたしも挨拶いたします、
蹄の足の勇者さま！
もし———をはばかることもないのなら、

――をすぐに使えるよう御用意を。

,一 ‘は伏せ字である。それがなにか、原注にはない。,’一 ‘は、単語一つを入れるようだ。伏せ字があるようなテキストも珍しいので引用した。妄想をたくましくして読むのも良いでしょう。美しい若い女が言う「林檎」はこの女性にも二つあり、「乳房」を示唆している。ファウストが官能の喜びを感じながら、この若い女と踊っているさなか、突如踊ることを止める。この若い女の口から、「赤いネズミ」(ein rotes Mäuschen) が飛び出したのである。メフィストはせっかくの「愛のひとときに」(in einer Schäferstunde) と、何でもないと説くのだが、その時にもう一つの幻影を見ているのである。

FAUST. Dann sah ich –

MEPHISTOPHELES. Was?

FAUST. Mephisto, siehst du dort

Ein blasses, schöne Kind allein und ferne stehen?

Sie schiebt sich langsam nur vom Ort,

Sie scheint mit geschloßnen Füßen zu gehen.

Ich muß bekennen, daß mir deucht,

Daß sie dem guten Gretchen gleicht. (4183-88, S.131)

ファウスト. それからおれには見えた――

メフィストフェレス. なにが?

ファウスト. メフィスト、あそこに見えないのか、

青ざめた顔の美しい子が一人遠くに立っているのが?

その娘はただのろのろとそこちよと移動しているだけだ。

その娘は足を縛られて歩いているようだ。

はっきり言おう、その娘が気立ての良いグレートヒェンに

似ているように思えるのだ。

さらに、その娘の首には「赤い一本のひも」(ein einzig rotes Schnürchen) が飾りのように結ばれているのを見る。ナイフの背の幅ぐらい (Nicht breiter als ein Messerrücken) のひもであった。そのときファウストはグレートヒェンの運命を予感するのだが、好きな者が好きなように演じている芝居がどうのこうのと、またもやメフィストにはぐらかされるのである。

ここで「ワルプルギスの夜」は終わっている。メフィストフェレスの企みも失敗したようだ。

(2022. 1. 23)